

環境との関わりを深めること

——グイ／ガナの道探索実践における指示詞と
ジェスチャーの用法

高田 明 Akira Takada

京都大学 Kyoto University email: takada@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp

1980年代ごろまでに一世を風靡した認識人類学、特に民俗知識や民俗分類に関する研究はその後、明示的に表明されない知識をどう扱うか、民俗知識や民俗分類は誰にとって在来知識なのか、私たちは他者を本当に理解できるのか、といった諸問題に直面した。言語人類学コミュニケーション論や会話分析の成果を取り入れつつ展開してきた相互行為の人類学アプローチは、こうした状況への有力な解決策の1つを提供しつつある。ただし、これまでの研究は主に会話の時間的な組織化のされ方に焦点をあててきたため、ジェスチャーなどを含むより広範な相互行為が環境に偏在する資源をどのように活用しつつ組織化されているのかについては未だ検討が不十分である。そこで本稿では、カラハリ砂漠の狩猟採集民・先住民として知られるグイ／ガナの道探索実践を事例として、近称・遠称の指示詞や直示的・描写的ジェスチャーがブッシュの中での移動や涸れ谷での狩猟活動においてどのように用いられているのかに関する相互行為分析を行う。さらにこれらを通じて、グイ／ガナが様々な立場の人々を社会的状況に巻き込みながら環境との関わりを深めていく過程について論じる。

〔言語人類学、相互行為分析、南部アフリカ、グイ／ガナ、道探索実践〕

I 序論

II 方法と対象

1 相互行為分析

2 カラハリ砂漠のグイ／ガナ

III グイ／ガナのカラハリ砂漠における道探索実践

1 指示詞と環境に連結したジェスチャー

2 ブッシュの中での移動

3 涸れ谷における狩猟活動

IV 結論

I 序論

民俗分類に注目した研究は認識（認知）人類学の白眉である。民俗分類は、ある文化的集団で培われてきた民俗知識（理論的な関心の違いを反映して、在来知、伝統的生態学的知識といった様々な呼び名が提案されてきた）に基づく分類体系のことを指す。初期の認識人類学は、こうした民俗知識は各々の文化において統合され、独自の分類体系を持つと想定していた[e.g. 福井 1991]。こうした研究は1980年代ごろまでに次々と公表され、文化人類学界の内外で大きな関心を集めた。しかし、研究が進むにつれて、初期の研究の前提を揺るがすいくつかの問題が明らかになってきた。その結果、1990年代後半以降、同じアプローチでこれらを凌駕するような業績はほとんどあらわれなくなった。

筆者[高田 2019]はこうした諸問題を以下の3つに整理している。まず、民俗知識は必ずしも精緻に語彙化され、体系的に理解されているとは限らない。むしろ、慣習的に実践されていても改めて表明しようとすると言葉に窮することが多い。例えば、日本人の多くは箸の使い方を心得ているが、その詳細を十全に説明できる人は稀だろう。そうした作法は実践共同体[Wenger 1998]の活動に埋め込まれており、その体系を通常のインタビューで明らかにすることは困難である。次に、民俗知識や民俗分類が誰にとって在来のものなのかという問題がある。エスニシティに関する膨大な研究が明らかにしてきたように、文化的集団の境界は固定されたものではなく、たいてい複合的、重層的に重なり合っている。さらに、文化的集団のメンバーはしばしばそうした境界を越えて移動する(Takada [2015] のレビューを参照)。こうした事実を鑑みると、民俗知識が各々の文化において統合され、独自の分類体系を持つという想定はナイーブに過ぎるし、民俗知識や民俗分類の概念が複数の文化的集団をまたがるやりとりにおいて有効かどうかは再考が必要である。さらに、1980年代以降の文化人類学界を呑み込んだ、私たちは他者を本当に理解できるのかというアポリアも、民俗知識や民俗分類の研究を困難にした。人類学者たちが民俗知識や民俗分類について語る正当性は疑われ、その政治性が糾弾されるよ

うになった[e.g. Clifford and Marcus (eds.) 1986 (1996)]。民俗知識や民俗分類についての語りから政治性を排除することは、たとえそれが当事者をうたう現地出身の民族誌家によりなされたとしても原理的には困難である。

上記の問題は、本稿が扱うグイ／ガナの道探索実践にもよくあてはまる。そしてこうした問題に対しては、現在も様々な解決策が模索されている。中でも有力なものの1つが、言語人類学コミュニケーション論や会話分析の成果を取り入れつつ展開してきた、筆者が相互行為の人類学と呼ぶアプローチである[高田 2019]¹⁾。相互行為の人類学は、フィールドで生じる極めて微視的な行為とその文脈の分析に関心を集中し、上述の諸問題に応えてきた。ただし、これまでの研究の多くは会話の時間的な組織化のされ方に焦点をあててきたため、ジェスチャーなどを含むより広範な相互行為が環境に偏在する資源をどのように活用しつつ組織化されているのかについては未だ検討が不十分である。こうした議論を推進する鍵概念の1つに、相互行為の人類学とはやや異なる知的伝統の下に発展してきた社会記号論系言語人類学(小山[2008]、本特集序論)の中心概念である指標性(indexicality)があげられる。

パースの記号論に由来する指標(index)は、シニフィアン(記号表現)とシニフィエ(記号内容)が時間的・空間的な近接性により結びつく記号のタイプ(例えばやってくる電車を示す踏切の音)で、しばしば類像(icon)(シニフィアンとシニフィエが図像的な類似性によって結びつく記号のタイプ。例えば似顔絵)、象徴(symbol)(シニフィアンとシニフィエが恣意的・慣習的に結びつく記号のタイプ。例えば言語的な語彙)と対置される[Duranti 1997; 小山 2008]。これらの記号のタイプは、ジェスチャーや言語の働きを考える上でも重要である。例えば、喜多[2002]はジェスチャーのタイプとして直示的(deictic)ジェスチャー(参照物を時間的・空間的な近接性によって指し示す。例えば指さし)、描写的(depicting)ジェスチャー(シニフィアンとシニフィエの関係が、ジェスチャーの身体的な動きと参照物の同形性に基づく。ただしその関係は慣習化には至っていない。例えば、直前に見た雲の形を両手であらわすジェスチャー)、エンブレム(emblem)(シニ

フィアンとシニフィエの関係が、その社会の歴史を反映して恣意的・慣習的に定まっている。例えば、人差し指と中指を立てて示すピースサイン)を提案しているが、これらはそれぞれ指標、類像、象徴の特徴を色濃く反映している²⁾。また言語はソシール以来その象徴としての特徴に注目が集まってきたが、指標(例えば、本稿で注目する指示詞(demonstrative))、類像(例えば、漢字などの象形文字)としての特徴も見られる[Duranti 1997; 小山 2008]。

これらのうち指標は、上記の定義から明らかにように文脈依存性が高い。実際の言語やジェスチャーは文脈や使用者に応じて多様な働きをするので、指標としての性質に注目する場合はこれを指標性と呼ぶ。指標性の概念は、ある記号がコミュニケーションの仕方にどう作用するのか明らかにすることで、言語やジェスチャーの使用という、辞書や文法書では記述しきれない広大な領域を統一的に議論する可能性を与えてきた(本特集序論、浅井論文)。中でもSilversteinは、記号論的言語人類学の分野で言語の指標性についての議論を推進してきた。彼は発話などのコミュニケーションが起こっている「今ここ」をオリゴと呼び、オリゴと言及対象の関係をどれだけ直接的・間接的に指標しているかによって様々な名詞句を階層化できると考える[シルヴァスティン 2009/1987; 小山 2009: 25-26]。例えば本稿で注目する指示詞は、直接性の高い名詞句を作る代表的な品詞である。名詞句階層という考え方は、ある文においてどんな名詞句を用いることが適切かは、その文が用いられるコミュニケーションの文脈を反映していることを明らかにするとともに諸言語間の文法構造の比較考量を推進してきた[Duranti 1997; Hanks 1996; 小山 2008]。

筆者は、南部アフリカの狩猟採集民・先住民として知られるサン(「ブッシュマン」としても知られる)のうちの近縁な2集団、グイ(Gui)とガナ(Glana)のもとで1990年代後半からフィールドワークを行い、その優れた道探索実践(wayfinding practices)、すなわち周囲の環境をモニターしながら目的とする場所へと移動するための道を感じとり、それに応じて自らの動きを調整していくこと[Ingold 2000: 220]を可能にする民俗知識や身体技法を精査してきた。こうした研

究に立脚しつつ、グイ/ガナの道探索実践で用いられる言語とジェスチャーの指標性に注目した相互行為分析(次章を参照)を行うことを通じて冒頭の問題意識を追究する、すなわちグイ/ガナの相互行為が環境に偏在する資源をどのように活用しつつ組織化されているのかを明らかにすること、さらにそれによりグイ/ガナの環境との関わり方の特徴について再考することが本稿の目的である。

II 方法と対象

1 相互行為分析

現代を代表する社会学者Emanuel Schegloffは、Harvey SacksやGail Jeffersonと会話分析を提唱・確立し、相互行為の人類学を含む幅広い研究領域に多大な影響を与えてきた。Schegloff [1987 (1998)] は、会話分析を行う研究者がある現象の特徴づけ(分析や考察)を正当化するためには、その特徴づけの適切性が、特徴づけられている状況への参与者にとっても適切である何らかの証拠を経験的(empirical)に示す必要があるという。そこで会話分析では、まず自然場面で収集された動画や音声を繰り返し視聴し、聞こえてくる全ての発話についてその発話者を同定し、その内容を先行研究の慣習に従った方法³⁾⁴⁾で丁寧かつ厳密に書き取っていく。続いて、そうして作成されたトランスクリプトに基づいて、ある行為がその文脈に埋め込まれ、その場に状況づけられて生じる一方で、その行為がその場を変化させ、後続の行為が生じる文脈を構成する過程を丁寧に解明していく。そのためには正しく理解しておくべき基本的な分析概念がいくつかある。まず、日常会話を秩序づける最も基本的な仕組みとされるのが順番交替システムである。音声言語では、複数の人が異なることを同時に話すことは聞き手の理解を妨げ、それゆえ忌避される。このため、一度に発話を行うのは基本的に1人だけである。また発し手は、その発話の終了が可能な点が近づくとしばしば次話者を明示的あるいは示唆的に示す。発話の終了が可能な点までに次話者が示されなかった場合は、その会話における任意の参与者が次話者になれる。

順番交替システムを構成する発話のやりとりの最小単位とされるのが隣接対(adjacency pair)である。隣接対には、挨拶-挨拶、質問-回答、行

為指示・受諾・拒否などがある。会話分析ではこのように、各々の発話が何らかの社会的な行為(action)をなすと考える。このうち前者の行為を第1成分、後者の行為を第2成分という。この呼応するペアからなる発話の連なりを基本連鎖という。基本連鎖はしばしば単なる隣接対よりもずっと複雑な形で展開する。言い換えれば、第1成分の前、第1成分と第2成分の間、第2成分の後には、さらに会話の要素が加えられることがある。これらをまとめて拡張(expansion)と呼ぶ。

上記の順番交替システムや各種の隣接対は規範的な特徴を持つ。すなわち、相互行為の参加者は行為に際してこれらを参照するが、実際の行為は必ずしもこれらに従わない。例えば日常会話では、しばしば行為が規範に反したり、言い間違えられたり、聞き取り難かったりする。そうした会話上の「トラブル」には、しばしば修復(repair)が起こる。

以上のような会話分析の基本的な分析概念は、主に英語圏での会話の分析から導かれたので、これらが英語圏以外にも適用できるかどうかは、十分な吟味を経る必要がある。この点で、相互行為の人類学は会話分析の応用だけではなく、その基本概念の再考を促す[cf. Sidnell and Enfield 2012]。実際、相互行為の人類学を進める研究者からは、これらの分析概念の普遍性に疑念が呈されている[e.g. 菅原 1998]。また会話分析は、会話の組織化に関わる要素が限られており、それゆえ分析しやすかった電話での日常会話からはじまった。だがその後の発展に伴って、分析する現象の範囲はジェスチャー、視線、表情、接触などにも拡がり、そのための方法論が整えられてきた。こうした会話分析を拡張した手法は、相互行為分析と呼ばれるようになっている[e.g. 西阪 1997]。相互行為分析は本稿のような、従来の研究とは大きく異なる文化的実践を分析するためにも有効である。

2 カラハリ砂漠のグイ／ガナ

グイとガナは親族関係、言語⁵⁾、儀礼、民俗知識といった面で近縁な関係にあり、道探索実践においても切り離せない特徴を備えている。そこで、本稿ではグイとガナを1つのまとまりとして扱う。グイ／ガナについてはすでに相当な数の民族誌が

ある(田中[2017]を参照)ので、以下では本稿のテーマと深く関連する事項に限定して概説する。

グイ／ガナはカラハリ砂漠の中央部、現在のボツワナで長年遊動生活を送ってきた。その生活域は総面積52,000km²という広大な中央カラハリ動物保護区(以下CKGRと略す)とほぼ重なる。これは1961年、人類学者であり政府のサン調査官でもあったSilberbauerが、グイ／ガナの生業が維持できるよう、その生活域を覆うようにCKGRの境界を定めたからである[Silberbauer 1965: 132-138]。その後、グイ／ガナはCKGR内に設けられた居住地に集まるようになった。中でも様々なインフラが整えられたコイコムは、グイ／ガナの最大の集落となった。人々が移動するきっかけは減り、集団の流動性は低下した。さらに1997年、コイコムの住人はCKGR外に設立されたコエンシャケネに移動した。移住はその後に進み、現在ではCKGR内の集落に住んでいた人々の大半がコエンシャケネに生活の基盤を移している。

優れた道探索実践は、グイ／ガナの遊動生活の特色を最もよく反映している活動の1つである。様々な探検家・旅行家や研究者が、サンの環境に対する知覚の鋭敏さを記述してきた[e.g. Liebenberg 1990]。だが、サンの道探索実践について人類学的な論考を進めていく上では、これを手放して賞賛することはできない。こうしたサンのイメージは、為政者に利用され、南部アフリカの政治的文脈に組み込まれてきたからである。20世紀前半、南西アフリカ(現在のナミビア)では白人の入植地からの職場放棄者を威嚇・追跡するために、その人物の足跡等の痕跡を見つけ出し、読み解くことに長けているとされるサンが登用されていた。さらに1970年代後半、この地域で南西アフリカ人民機構(SWAPO)による南アフリカからの「解放運動」が活発化すると、南アフリカ軍はサンを積極的に登用し、対ゲリラ戦用の部隊を編成した⁶⁾。こうした歴史は、SWAPOが与党となった現在もナミビアにおけるサンのイメージやサン自身の記憶に影を落としている[Takada 2015]。

一方、ボツワナのグイ／ガナは、ナミビアをめぐる政治的な争乱には直接は関わってこなかった。さらに、サンの道探索実践の特徴とそのエシニティの政治的な位置づけの関係は一義に決ま

るものでもない。そこで筆者は、グイ／ガナの道探索実践の特徴をその政治的な位置づけとはひとまず切り離して論じてきた [Takada 2006, 2008, 2016a, 2016b]。その結果、先の政策が利用した俗信とは異なる道探索実践の特徴が明らかになりつつある。すなわち、サンをトラッカーとして登用した政策は、サンの人並み外れた資質をその「獣性」に基づくという俗信と結びつけた [Gordon and Douglas 2000: 2] のに対して、筆者の一連の研究は、グイ／ガナの優れた道探索実践はそのコミュニケーションの様式と深く関わっており、同じような経験をすれば誰もが発達させうることを示している。

グイ／ガナの道探索実践では、その生活域の様々なスケールの自然環境に対応する次のような移動方略が用いられる [Takada 2006, 2008, 2016a]。(1) 草や障害物の少ないポイントの把握：グイ／ガナはブッシュを移動する際にこうしたポイントをすばやく見つけてつなぎ合わせる。(2) 特定の樹木の生育場所に関する知識：こうした樹木は移動の際にランドマークとなる。(3) 疎林や水たまりを中心とした環境の理解：疎林や水たまりの付近の土地は、キャンプ地として利用されたり、長距離移動の際の経由地点となったりする。(4) 疎林や水たまりの連年の概念化と

利用：疎林や水たまりの連年は、長距離移動のルートとなったり、狩猟採集活動の際の地理的な参照枠となったりする。

グイ／ガナはこうした移動方略やそれを可能にする民俗知識や身体技法により、その生活域における「自然」と「文化」を融合してきたといえよう。本稿ではこれらのうち、ブッシュの中での移動（上述の（1）の移動方略と深く関連する）や、涸れ谷における狩猟活動（上述の（4）の移動方略と深く関連する）において、序論で提示した目的を検討する。

III グイ／ガナのカラハリ砂漠における道探索実践

1 指示詞と環境に連結したジェスチャー

グイ語／ガナ語には、近称と遠称を示す $\eta\lambda\eta$ と $ʔáá$ という 2 種類の指示詞がある。これらはいずれも自由形式をとる、つまり会話において単独で用いることができる（抜粋 1）。

また、これらの指示詞と方向をあらわす小辞 $zá$ や場所をあらわす小辞 $xò$ などを組み合わせることで、道探索を行う人とその移動経路やランドマークとの関係を言語的に詳細にあらわせる。さらに抜粋 1 のように、指示詞はしばしばジェスチャーとともに用いられる。グイ／ガナ

抜粋 1

1 G: $\eta\lambda\eta$ $tà$ $xá$ $dáò-bè$ $àà$
straight FOC way-m:s:N come
前の方に道は出てくる

→ 2 T: $\eta\lambda\eta$ ⁽¹⁾
DEM (near)
こっち

(1) T は親指以外を延ばして右手を前方に差し出し、上下に振る (写真 1)。

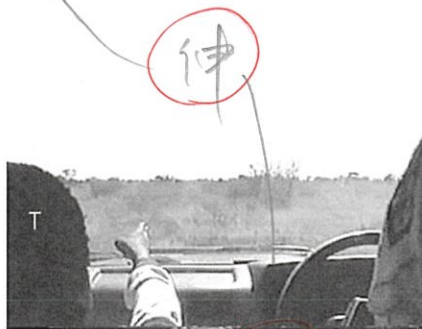


写真 1 T は親指以外を延ばして右手を前方に差し出し、上下に振る

抜粋2

→ 1 O: [ʔáá] ʔáá ɲĩĩ cà ʔĩĩ⁽¹⁾ llàrà-sì =
DEM (far) DEM (far) DEM (near) like look -f:s:N
[あの]、あの、こんなカラの木か=

→ 2 G: =ae ɲĩĩ tà ʔĩĩ⁽²⁾ llàrà-sì
INT DEM (near) like look -f:s:N
= そう、こんなカラの木だ

- (1) O は ((llàràの樹形を描くため)) 両手首を向かい合わせにくっつけ、両手の掌を左右に広げる。
(2) G も両手首を向かい合わせにくっつけ、両手の掌を左右に広げる (写真2)。

llàrà ぞろ

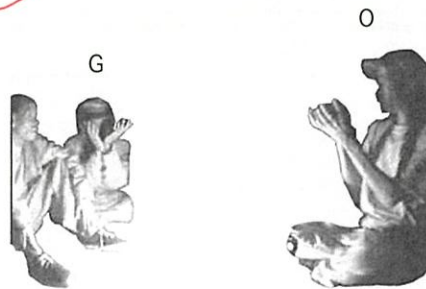


写真2 G (左) は、O (右) の発話/ジェスチャーをほぼ完全に繰り返す

では、喜多 [2002] が提案した直示的ジェスチャー、描写的 (depicting) ジェスチャー、エンブレム (emblem) の区分のいずれもが確認される [Takada 2005]。抜粋1の腕を差し出して指を振るジェスチャーは、直示的 (deictic) ジェスチャーの典型である。

抜粋2は、近称の指示詞ɲĩĩとカラの樹木の形状 (枝葉の繁り方) をあらわす描写的ジェスチャーが組み合わせられた例である。1行目では、まずランドマークとして用いられる特定のカラの樹木の記憶をたどるために遠称の指示詞ʔááが用いられ、続いてそのカラの樹木の形状をその場で表象=再現化するために近称の指示詞と描写的ジェスチャーが組み合わせて用いられている。さらに、2行目でも後者の用法が繰り返されている。

C. Goodwin [2007] は、環境の中の事物と身体化された行為をつなぎ、そうした事物をその行為者と関連づけて分類するジェスチャーの働きに注目し、そうしたジェスチャーを「環境に連結したジェスチャー (environmentally coupled gesture)」と呼んだ。原理的には、直示的ジェスチャー、描写的ジェスチャー、エンブレムのいずれも、環境に連結したジェスチャーとして用いることができる。Takada [2016a] は、グイ/ガナが道探索実

践で環境に連結したジェスチャーを用いることにより、環境の中で自分たちの移動経路を直示的に指し示したり、その環境内のランドマークを描写したりすることに注目している (抜粋3)。

1行目でKは遠称の指示詞ʔááを用いて、一行が折り返した地点を指示している。遠称の指示詞は一般に、聞き手に参照物を推測するための背景知識を要求する。ここでKが遠称の指示詞を用いたのは、先行するやりとりですでに一行が折り返した地点に関する議論が行われており、そのためAも遠称の指示詞が指す地点を理解できるとみなしたからである。これを受けたAの相づち (2行目) に続き、Kはさらに語りとジェスチャーを組み合わせ、移動ルートを説明した (3行目)。ここでKは、「こっちに回って」、それから「こんな風に来たんだ」という発話に合わせて、右手を弧を描くように水平に動かし (写真3)、それから胸の辺りに持ってきている (写真4)。

ここでは、Kの右手が直示的ジェスチャーとして一行が移動ルートに用いた地形をたどるために用いられていると同時に、この右手の動きは描写的ジェスチャーとして移動ルートに沿った一行の動きを表象している。さらにKは、右手をその胸の辺りに持ってきて自らを指さした時、この相

抜粋3

1 K: ʔáá ɔ̀ò ɔ́á ʔállàè dōrē.
DEM (far) PP (plc) FOC 1:m:p (in):N turn
あそこで俺たちは曲がって.

2 A: mh:m
INT
ン、フ：ン

→ 3 K: ɲlĩ ɔ̀ò áamá⁽¹⁾ ɲlĩ tàná àà
DEM (near) PP (plc) turn DEM (near) like come
こっちに回って、こんな風に來たんだ

4 A: mh:m
INT
ン、フ：ン

(1) Kは右手を水平に弧を描くように動かし(写真3)、胸の辺りに持ってくる(写真4)。



写真3 K (中央) は右手を水平に弧を描くように動かす



写真4 Kは右手を胸の辺りに持ってくる

互に関連したジェスチャーの動きを重ね合わせている。すなわちこの環境に連結したジェスチャーは、Kの身体を描写的な移動経路の終点として用いるだけでなく、その場の全ての生態環境の中心に位置づけている。Goffman [1964] は、相互行為において参与者の志向性、共有された注意、共同的な行為が構成される舞台の境界を「生態学的な群がり (ecological huddle)」と呼んだ。生態学的な群がりとは環境と相互行為が生じる舞台を区切る。しかし、上記の環境に連結したジェスチャーは、ここでの生態学的な群がりを生態環境の中に融解させている。Kは自己を中心において環境全体を身体化し、相互行為の舞台は景観の全体と重なったのである。

以下では、こうした近称・遠称の指示詞や環境に結びつけられたジェスチャーの動きをさらに論じるために、これらがブッシュの中での移動や涸れ谷での狩猟活動においてどのように用いられるのかに関する相互行為分析を行う。

2 ブッシュの中での移動

グイ／ガナは、深く、通り抜け難そうなブッシュでも、素早く障害物が少ないポイント特定し、それらをつなぎ合わせて進むべき道を見出すことに長けている。つまり、グイ／ガナは移動する際、景観の中の有用な情報を連続的にピックアップし、そうした情報のフローの中で行為を調整している [Takada 2008]。以下では、こうした知覚と行為の調整を行うために、指示詞やジェスチャーがどのように用いられるのか分析する。抜粋4はTakada [2008] のExcerpt 2の直後に生じた。この時 (2000年4月、以下の年代は全て当時)、筆者は数年前までグイ／ガナが住んでいたコイコムの付近をインフォーマントと車で移動していた。車を運転しているNは20代後半の日本人で、カラハリ砂漠での移動に関する知識や経験が浅い。Nの左側には10代後半のガナの男性T、その左には60代のガナの男性Dが座っていた。左の後部座席には50～60代のガナの男性G

抜粋4

- 1 D: dáo ðēnā kà ðēnā kà dáo ɲláo-sì xá ?í
way enter PP (condition) enter PP (condition) way old-f:s:A POS be
道に、入っていけば、入っていけば古い道があるんじゃないか
- 2 G: ee ⁽¹⁾, ɲlĩ tsé ɲláo dáo-sì ?í (.) ɲlĩ
INT DEM (near) 2:m:s:N old way-f:s:A be DEM (near)
そうだ。この、お前が（指している）古い道だ。こっち、こっち
- 3 N: ここか？ ⁽²⁾
DEM (near) Q
- 4 D: ?ári qɣ'ôô dáo-sà ?áá zá táó
3:c:p:N past (distant) way-f:s:A DEM (far) PP (dir) pound
やつらがあっちの道をならした
- 5 G: ⁽³⁾ ?ési kà xá kámà-xà, ?ési xá ?í kámà-xà
3:c:p:N PP (toward) POS detour 3:f:s:N POS be detour
そっちは回っていける。そっちなら回っていける
- 6 T: ⁽⁴⁾ ?áá-sì cíé
DEM (far) -f:s:A stop
あそこで止まれ
- 7 G: ehe, ⁽⁵⁾ ɲlĩ ɣò wà !úú ɲlórèjù ⁽⁶⁾ ?áá ɣò wà tà,
INT DEM (near) direction PP (in) go NAME DEM (far) direction PP (in) PTC
そうだ。こっちの方に行け。ɲlórèjù、あっちの方に
- ɲlĩ tà síí zá
DEM (near) PTC arrive PP (dir)
こちに着いたら。
- 8 N: こっち？ ⁽⁷⁾
DEM (near)
- 9 T: =ɲlĩ ⁽⁸⁾
DEM (near)
こっち
- 10 N: ん、こっ [ち？ ⁽⁹⁾
INT DEM (near)
- 11 T: [ɲlĩ ⁽¹⁰⁾
DEM (near)
こっち
- 12 N: こっち ⁽¹¹⁾
DEM (near)
- 13 T: n:
INT
んー
- 14 N: =んー
INT
((Nはハンドルを右に切りながら、アクセルを踏んで車を右前方に運転し始める))
(5.5)
- (1) Gは後部座席から人差し指を伸ばした右手を出し、車の右側を指す。
(2) Nは人差し指を伸ばした右手を右前方に伸ばす。
(3) Gは右手の人差し指を鍵状にして内側に曲げ、車を左側に動かすことを指示する。

- (4) Tは人差し指を伸ばした右手を右前方に伸ばす。
- (5) Gは親指以外の指を伸ばした左手で、右前方を指す。
- (6) Tは親指以外の指を伸ばした左手で、右斜め前方を指す。
- (7) Nは人差し指を伸ばした右手を右前方に伸ばす。
- (8) Tは親指以外の指を伸ばした左手で、前方（(6)よりやや左側）を指す。
- (9) Nは人差し指を伸ばした右手を左斜め前方に伸ばす。
- (10) Tは親指以外の指を伸ばした左手で、右前方を指す。
- (11) Nは人差し指を伸ばした右手を右斜め前方に伸ばす。

が座っており、その右側つまり運転手の後ろには当時20代後半だった筆者がビデオを構えていた。Nは女性、それ以外は全て男性である。

運転手のNは、ブッシュの中で車を運転するという、経験の浅いものには困難な課題に直面している。グイ／ガナの同乗者たちは、進むべき道を示すため発話とジェスチャーを効果的に用いる。1行目の発話でDは、彼の示す方向に進めば、以前この土地に住んでいたグイ／ガナが使っていた「古い道」があることを示唆する。この発話はDが以前の記憶を呼び起こし、その記憶を共有する車内の人々に向けて行ったものだと考えられる。それに応えてGはまずDの意見を肯定し、さらに近称の指示詞と指さしを組み合わせるその「古い道」を指し示している（2行目）。ここでGはDの意見を肯定しただけでなく、より具体的に指示を行っている。この間も車は進んでいるので、発話の最後では再び近称の指示詞でその「古い道」を指し示している。これに応じてNも指さしと近称の指示詞を組み合わせ、自らの理解を確認している（3行目）。ただしこの発話は日本語で行われており、直接には直前の発話者のDやGではなく、日本語が理解できるAを受け手（addressee）、車内の他の人々を聞き手（hearer）としてデザインされている。

続けてDはさらに記憶を想起し、自分たちがその道をならしたと述べる（4行目）。この文の主語となっている?ariは三人称・通性・複数・主格を示す人称代名詞、時制は遠過去であることから、その道はだいぶ昔に少なくともDと受け手が知っている人々がならしたものであることがわかる⁷⁾。また、その道を説明するために遠称の指示詞?aaと方向を示す後置詞zaが用いられていることから、その道はすぐ目の前ではなく、一定の距離をおいた場所に伸びていることが示されている。それを受けてGは、右手の人差し指を鍵状にして内側に曲げたジェスチャーで車を左側に動かすこ

とを示すと同時に、Dが示した道の方に迂回すれば目的地に向かって進むことができると示唆している（5行目）。このジェスチャーは、一行が進むべき方向を直示するとともに、そのための車の動きを描写している。またこの発話で用いられている動詞の交替形kama-xàは、目的地に向かってまっすぐ進むのではなく、障害物等を避けるために一旦別方向に進み、その後また進む方向を調整して目的地に向かうことをあらわす。

DやGの発話を受けて、今度は若いインフォーマントのTが運転手Nに「あそこで止まれ」と行為指示を行う（6行目）。行為指示は隣接ペアの第1成分で、行動もしくは発話による受諾や拒否を第2成分にとる。この発話でTは、Dと同じ遠称の指示詞?aaを用いている。ただし、遠称の指示詞を直示的な指さしと組み合わせることで、土地勘のないNにも進むべき方向が視覚的に確認可能なように発話をデザインしている。続けてGは7行目で、まず直前のTの発話を肯定的に受け止め、さらに近称の指示詞と指さしを組み合わせる今この地点から進むべき方向をより具体的に示している。さらに、Tの名前を呼ぶことで彼を受け手として選び、遠称の指示詞と近称の指示詞を組み合わせるこれから進むべき方向についての指示を再定式化している。Tはこの指示をモニターしながら、車の進行に合わせて指さす方向を調整している。

この発話を受けてNは再度、指さしと近称の指示詞を組み合わせ、自らの理解を確認している（8行目）。だが、これはインフォーマントたちが伝えた方向とはかなりずれていた。Tはすぐさま、近称の指示詞とともに親指以外の指を伸ばした左手でNが指した方向より左前方を指す（9行目）。それを受けてNは、まずTが示した情報を受け取ったことを示す感嘆詞を発し、続けてまた指さしと近称の指示詞を組み合わせる自らの更新された理解を示す（10行目）。ところがこれもま

た、Tが伝えたい方向とはずれていた。Tは、Nの発話の途中で再び近称の指示詞を発するとともに左手で、Nが指した方向よりやや右前方を指す(11行目)。Nはこれをフォローするかたちで再度、指さしと近称の指示詞を組み合わせ用いる(12行目)。この発話では語尾の音が一端上がった後また下がっており、一連のやりとりを受けてNの理解度が上がったことがわかる。続く13行目ではT、さらに14行目ではNがそれぞれ同意を示す感嘆詞を発している。ここにおいて、TとNの間では進むべき方向について当面の相互理解が達成された。Nはその理解に基づいてハンドルを右に切りながら、アクセルを踏んで車を右前方に運転し始める。

ブッシュでは全ての人が地面の状態に鋭敏でその付近の土地に詳しいとは限らない。そこで、集団での移動を成功させるには、知識状態の異なる活動の参加者がコミュニケーションを通じて相互理解に達する必要がある。上の事例のように一台の車に大勢の人々が同乗している場合は、そのための相互行為が特に促進される。ここでは、まずこの付近の土地に明るいDが眼前の光景から過去の記憶を呼び起こし、それを経験の豊富なGがより具体化して、若いTを通じて運転手に伝えている。日本人でこの付近の土地に詳しくないNが運転手だったことは、それぞれの参加者が環境についての民俗知識をより明示的に定式化することを促している。こうした相互行為を分析することは、文化的な境界を越えて相互理解が可能であることを示すとともに、伝統的な文化人類学では隠蔽されてきたフィールドワークの間主観的な基盤[Clifford 1986: 109]を直接的に議論の俎上に載せる試みでもある。

相互理解を志向する相互行為では、上記のように近称や遠称の指示詞、直示的ジェスチャーや描写的ジェスチャーが頻繁かつ効果的に用いられる。このうち近称の指示詞は、受け手あるいは聞き手がその場で景観内のどこに注意を払うべきかを聴覚的に指示する。直示的ジェスチャーは、そうした注意を払うべき方向やポイントを視覚的に指し示す。近称の指示詞と直示的ジェスチャーはいずれも指標性が高い。また前者は聴覚的、後者は視覚的なメディアなので、実際の相互行為ではしば

しば補い合って働く。上の事例ではGが近称の指示詞と直示的ジェスチャーを組み合わせDの記憶をより具体化している。また日本人のNは、車に同乗していたインフォーマントからの教示を受け、やはり直示的ジェスチャーと近称の指示詞を組み合わせ、日本人のAを受け手、インフォーマントを聞き手として自らの理解を確認している。

遠称の指示詞は一般に、何を指しているかを理解するために受け手が話し手と一定の知識を共有していることを必要とする。そのため遠称の指示詞が用いられる相互行為では、しばしば発話の交換を通じた参加者間の知識状態の調整が促される。上の事例では、まずDが遠称の指示詞を用いて土地についての記憶をあらわしている。続いてGが一行の進むべき方向を示す直示的ジェスチャーと車の動きをあらわす描写的ジェスチャー、さらにその動きを言いあらわす語彙を組み合わせDの記憶をより具体化し、Tに示した。このように話し手は、描写的ジェスチャーで動作や状態を視覚的にあらわすことでも受け手との間の知識状態のずれを調整できる。

話し手はまた、遠称の指示詞をより指標性の高い近称の指示詞や直示的ジェスチャーと組み合わせ用いることで、知識の共有度の少ない受け手の知覚や行為をより空間的・時間的に離れたところに誘導することもできる。上の事例では、Tが遠称の指示詞と直示的な指さしを組み合わせ、進むべき方向が視覚的に確認可能なようにNに向けた発話をデザインしている。Gはそれを肯定的に受け止め、遠称・近称の指示詞と直示的ジェスチャーを組み合わせTにより具体的な指示を行った。これを受けて、NとTは近称の指示詞と直示的ジェスチャーを用いてそれぞれの理解を示し、それを相互に調整し、相互理解に達した。

以上のように、近称や遠称の指示詞、直示的ジェスチャーや描写的ジェスチャーはそれぞれの特長を活かしながら組み合わせることで、ブッシュでの移動に関して知識状態の異なる活動の参加者が相互理解を達成することに貢献している。重要なのは、これらの発話やジェスチャーは空虚あるいは中立的な空間ではなく、コミュニケーションに用いることの可能な様々な記号論的資源[Goodwin 2000]に満たされた場において表明されることである。言い換えれば、これらの発話や

ジェスチャーは、そうした記号論的資源と相互行為の参与者をつなぐ。そうした場合には、ジェスチャーだけでなく発話もまた環境に連結しているといえる。

こうした特徴は、車による道探索実践だけに見られるわけではない。例えば、地面の状態についての鋭敏さやそれを参与者間で共有するための方略は、グイ／ガナが狩猟活動で動物の痕跡をたどる際にも用いられる [Takada 2008]。グイ／ガナの優れた道探索実践は、より幅広い相互行為の文脈でどんな記号論的資源が時間的・空間的にどのように組織化され、参与者に共有されるのかを精査することでより深く理解できるだろう。そこで以下では、涸れ谷での狩猟活動において近称・遠称の指示詞、直示的・描写的ジェスチャーがどう働いているのか検討する。

3 涸れ谷における狩猟活動

カラハリ砂漠の地形の特徴の1つは平坦さだが、その地形には緩やかな凹凸も認められる。グイ／ガナはこうした地形に関する様々な概念を語彙化しており、道探索実践ではそうした概念が重要な役割を果たす。その一例である「カー (iqāā)」は、涸れ谷と訳される。グイ／ガナは、カーはハウ (llxáá)：疎林) やクー (lòò：水たまり) の連なりからなると考えている。カーは、グイ／ガナの長距離にわたる移動経路や猟場として用いられてきた。グイ／ガナによれば、カーの砂は柔らかく、そうした砂地に生える様々な植物が繁茂している。そしてこれらの植物を好んで餌とする草食動物が集まってくる。グイ／ガナはこうした草食動物を探して、しばしばカーの付近に狩猟行に出かける [Takada 2016b]。

以下にそうした狩猟行の一例を示す。筆者は2004年2月にインフォーマントたちと連れだってホイバンという土地を訪れた。ホイバンはCKGRの境界の西側にほぼ面し、この地域を東西に横切って延びるカーに接している。私たちはカーの北側の岸に自動車を停めた。ハンターたちと筆者はトビウサギ猟のために自動車を離れ、カーの中央部にあたる西の方向に歩を進めた。その後、私たちはカーの支流に囲まれた尾根に到達し、その尾根に沿ってさらに南下した。ノネの木群を通り過ぎた後、私たちは方向転換し、東に向

かった。そしてカーを横切って南側の岸に到達し、それから今度は北の方向に進んで再びカーを渡り、自動車のところに戻った [Takada 2016a]。抜粋5は、上記の行程で一行がカーの南側の岸に到達する少し前に生じた会話からとられた。ここで一行はトビウサギの新しい足跡を見つけた。この時は、Dが鈎竿を巣穴に射し込んで中にいるトビウサギを探し、そのちょうど上辺りでOが獲物を掘り出すための穴を掘っていた。K、G、Tと筆者はその脇で集まって休憩していた。Kは当時40代の経験豊富なハンター、それ以外は抜粋4でも登場した人々である。カーの凹凸は緩やかで、少なくとも経験の浅い筆者には、目視のみで確認することは容易ではない。ここでも、はじめ筆者はカーを渡ったことがわかっていなかった。この抜粋の直前、筆者が自動車の位置を質問したことを契機に、K、G、Tが移動ルートを説明し始めた。先に見た抜粋3は、車をおいた場所から現在地までの移動ルートについて述べた部分である。抜粋5はその直後 (= 抜粋3の直後) に生じた。

Kはここで、現在地から車をおいた場所まで、つまりこれから進むべき復路の移動ルートを説明している。1行目でKはまず、遠称の指示詞で進むべき方角を示すが、すぐさま近称の指示詞と直示的・描写的なジェスチャーを用いてそれをより具体的に言い直す。近称の指示詞を用いた「こっちの方に」という部分は右手を正面に延ばすジェスチャーとともに発せられ、「入って」という部分では伸ばした右手の掌がわずかに下がる (写真5)。続いて、近称の指示詞を用いた「こーやって曲がって」という部分では、正面に伸ばした右手を水平に左向きに弧を描くように動かし左斜め前で一旦止めている。さらに、遠称の指示詞を用いた「あそこを通れば」という部分では、その右手の掌をひねりつつ水平左向きに弧を描くように左真横辺りまで動かし (写真6)、それから「車に着くんだ」という部分を発する (3行目)。写真5、6のジェスチャーは一行がこれから進むべき方向を指し示すだけではなく、一行がカーの岸 (バンク) に達すること (写真5)、カーの岸を進んだ後に車に着くこと (写真6) を描写的にもあらわしている。

1、3行目のKによる説明にAは相づちを2回行っている (2、4行目)。一般に、説明という

抜粋5 (抜粋3の直後)

1 K: n: ⁽¹⁾ ?áā χò ŋlĩ χò ʔāā ⁽²⁾ ŋlĩ t̃àná (0.2) dōrē
INT DEM (far) direction DEM (near) direction enter DEM (near) like turn
ん〜、あっちの方、こっちの方に入って、こうやって曲がって

t̃àná m̃ like 9 上
dōrē 12 turn 9 上

2 A: n:
INT
ん〜

3 K: ⁽³⁾ ?áā ŋéé yà kúní-sì wà () síí
DEM (far) pass and car-f:s:N PP (in) arrive
あそこを通れば、車に着くんだ

4 A: mh:m
INT
ふ〜ん

5 K: ?áā gʔòō-llò ʔállàà xá chē
DEM (far) springhare-m:p:N 1:m:p (in):N POS PTC
あのトビウサギたちをワシらは

6 G: e he:n
INT
そうだ

7 K: gʔúá-sì kà gʔòō-llò ŋlúá
evening-f:s:G PP (time) springhare-m:p:G cook
夕方にはトビウサギたちを煮るんだ

8 A: n:
INT
ん〜

9 O: lám
two
2 羽だ

(6.5) ⁽⁴⁾

10 G: ʔéllòh xà cúa tsēyà ⁽⁵⁾
3:m:p:N FOC NEG be and
そいつらは ((今掘っているところには)) いない

11 O: ʔéllò ae qʔ'áíʔò ʔi ŋláo xá
3:m:p:N INT face be old FOC
そいつらは、アエ、((今掘っている)) 巣穴の入り口には古い ((足跡だけがある))

はい、look です

12 K: n:n ʔéllò ŋlĩ tà ʔĩ ʔáé-sì wà (xá háā)
INT 3:m:p:N DEM (near) like lod)house-f:s:A PP (in) POS be
ん〜そいつらはこんな風に巣穴の中にいるんだ

((5行中略))

伸 ok

- (1) Kは右手を正面に伸ばして一旦止め、掌をわずかに下に下げる(写真5)。
- (2) Kは正面に伸ばした右手を水平に左向きに弧を描くように動かし、左斜め前で一旦止める。この間、Tは左の頬に右手をあてながら歩いてKに近づいてくる。
- (3) Kは左斜め前に伸ばした右手の掌をひねりながら水平左向きに弧を描くように左真横辺りまで動かし(写真6)、続けて右手を胸の辺りに持ってくる。
- (4) Gは左手に紙巻きタバコを持ったまま立ち上がる。
- (5) Gはタバコを吸い始める。その後、Aはカメラを水平左向きにパンして周囲の景観を撮す。このため、16行目途中まで画面には人は映っていない。

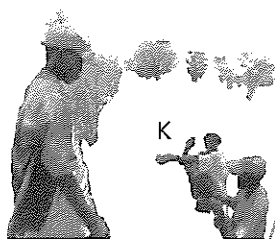


写真5 Kは右手を正面に延ばして止め、掌をわずかに下に下げる



写真6 Kは延ばした右手の掌をひねりつつ左真横辺りまで動かす

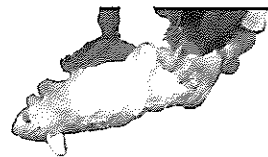


写真7 抜粋5-7の後で掘り出されたトビウサギ

話し手の行為に対して受け手は理解の程度を示すことが求められる。ここでのAの応答は、Kの説明に対する十分な理解を示したとはいえない。そこでKは発話を拡張し、さらに未来の出来事について語り始める。5、7行目のKの発話は、今日仕留めたトビウサギをみんなで夕方に料理して食べるというプランをAに伝えている。Gはいち早くKの発話の途中でそれに同意している（6行目）。だが、Aの応答はまた相づちのみでそっけない（8行目）。次に、トビウサギの巣穴を掘っていたOが「2羽だ」といって会話に参加する。実はここに至る前に一行はすでにトビウサギを1羽仕留めていた。この巣穴にいたトビウサギはその後掘り出され（写真7）、Oが示唆した通り、その日の2羽目の獲物となった。AはここでもKたちの語りに十分な理解を示さず、会話にはやや長い沈黙が訪れる。

その後、今度はGが「そいつら（トビウサギたち）」は（今掘っているところには）いない（10行目）。この発話はその場の状況へのコメントとして働いている。これにすぐさまOが同調し、今掘っている巣穴の入り口には古い足跡だけがあり、したがってこの巣穴にはトビウサギはいないという（11行目）。一方、Kはその巣穴の中にはこんな風にトビウサギがいるんだと述べて、GとOに反論する（12行目）。その後、G、O、Kの間でKのタバコに火を付けるライターをめぐる5行の発話が交わされる（本稿の主題とは関連が薄いためトランスクリプトでは省略する）。

次にGは過去の出来事について語り始める（抜粋6）。この語りはSacks [1992] のいう第2の物語りの特徴を示している。物語り（storytelling）は、話し手が複数の単位からなるターンを生み出

抜粋6（抜粋5の続き）

18 G: ⁽⁶⁾ ae ɲĩĩ ʃò wà sũũ ?állaè qɣ'ôô ci
INT DEM (near) direction PP (in) soon 1:m:p (in):N past (distant) ASP (hab)
アエ、この辺りではすぐに俺たちは昔は

k^huà ts^háo wà #qɣ'úã-xò
PP (like) dig PP (in) be come out
((トビウサギを)) 掘り出したのに、

(6.0) ⁽⁷⁾

19 G: ⁽⁸⁾ lqɣ'aré ʃá ?állaà ?ũē kà ci llo háé ci ts^háo
little FOC 1:m:p (in):N all PP (time) ASP (hab) -m:p:N hall ASP (hab) dig
少し、俺たちはそいつらの穴をどれもかも掘っていた

20 K: háé glúà kóbákò ⁽⁹⁾ sũũ ci
hall wide then soon ASP (hab)
大きな穴（掘っていた）、そしたら（トビウサギは）すぐに（出てきた）

- (6) Gは両手を使ってタバコを紙で巻き始める。
(7) Tは右手でGから紙巻きタバコを受け取る。
(8) Gはタバコを口にくわえながら両手でタバコを紙で巻いている。
(9) Gは左手でタバコを手を取る。

す間、話し手と受け手との間の通常の順番交替の取り決めを一旦停止させる、一種の拡張型の語りとみなせる [Schegloff 2007 ; Stivers 2013]。第2の物語りでは、第1の物語りを何らかの点でアップグレードすることが求められる [Sacks 1992]。ここでGは、両手を使ってタバコを紙で巻きながら残念がるような感嘆詞を発し、続けてこの付近では昔はどれでも巣穴を少し掘ればトビウサギがすぐに (= 今より簡単に) 獲れたという (18、19行目)。Kはこの発話には同調する (20行目)。

続いてDが「((トビウサギが)) 入ってるぞ」と述べる (抜粋7 : 21行目)。Dは経験豊富なハンターで、この時は鉤竿で巣穴の中の状態を探っていた。したがって、その場の人々の中で最も直接的にその巣穴の中にトビウサギがいるかどうかを感じとれる立場にある。21行目の発話は短く、しかも会話の時間的設定が過去から現在に替わったためか、やや長めの間が空く。それでもこの発話を契機として、会話の焦点はまた現在に戻る。KはDに向かって「エ?」と聞き返す。この発話は先行する発話の理解に関してトラブルがあったことを示すもので、修復を促す発話 [Schegloff 2007 ; Kitzinger 2013] と特徴づけられる。これを受けてDは、さらに鉤竿で巣穴の中の状態を探りつつ前方に左手を伸ばして指さしを行い (写真8)、「そこに人々がいるところ、[ノネの木)のところに ((トビウサギが入っている))」と述べる (23行目)。この発話の後半部分と重複しつつ、KはOの手前にあるノネの木を指さし、同時に近称の指示詞で巣穴の中でトビウサギが潜んでいる場所を確認する (24行目)。続く25行目のKの発話は、先行発話での重複を解消するものである [Schegloff 2007 ; Hayashi 2013]。Kは21、23行目のDの発話を再定式化して「((ノネの木)) 方に、そいつ ((トビウサギ)) はいる」と述べ、さらにOに向かって「そっち ((ノネの木)) の方を掘れ」と行為指示を行う (25行目)。Dはすぐさまこれに同調する。すなわち、Dは右手で鉤竿を使いつつ左手で前方を指さし、25行目のKの発話を再定式化する。さらに、Oに行為指示を行う (26行目)。続いてKが「((ノネの木)) 方で、それ ((トビウサギ用の鉤竿)) は曲がっている」と説明を補う (27行目)。巣穴は地中で複雑に曲

がりくねっており、その先にいたトビウサギをDが鉤竿で押さえつけたようである。

上記の会話では、調査者Aに対して、D、G、K、T、Oが基本的には協調的に、ただし時には対抗的に (例 : GやOの今探している巣穴にはトビウサギはいないという意見に対するKの反論) 一行が進むべき移動経路や狩猟の状況について説明を行っている。さらに彼らの説明は、Aがそれに対する十分な理解を示さなかったことを受けて、いくつかの物語りへと発展する。この過程では、未来 (例 : これから進むべき移動ルートの説明、夕食についての語り)、現在 (例 : 今探している巣穴にトビウサギがいるかどうかについての語り)、過去 (例 : 昔のこの付近におけるトビウサギの状況) の出来事についての語りが行き来している。会話内容の時間的フレームの移行に際して、上記の会話では近称・遠称の指示詞、直示的・描写的ジェスチャーが次のように効果的に用いられている。

まず遠称の指示詞は、オリゴを離れた出来事について述べるのに便利である。上述の会話でKは、これから進むべき復路の移動ルート、すなわち未来の出来事を説明するため、まず遠称の指示詞で進むべき方角を示している。近称の指示詞と直示的ジェスチャーはそうした出来事とオリゴをつなぎ、話し手と聞き手の視点の移行をスムーズにする上で有効である。上述の会話で遠称の指示詞によって進むべき方角を示したKは、すぐさま近称の指示詞と直示的ジェスチャーを組み合わせるそれを言い直し、より具体的に移動ルートを説明し始めている。また、会話のトピックが一旦昔のこの付近の状況に移行した後、DとKはそれを再び現在に戻す発話を行っているが、そこでも直示的なジェスチャーと近称の指示詞が効果的に組み合わせられている。すなわち、Dは鉤竿で巣穴の中の状態を探りつつ指さしを行い (写真8)、トビウサギがいる場所を具体的に述べている。続けてKはノネの木を指さしながら、近称の指示詞でトビウサギが潜んでいる場所を確認している。

また、描写的ジェスチャーは指示的なジェスチャーと組み合わせられることで環境と連結される。上述の会話では、写真5、6のジェスチャーは一行がこれから進むべき方向を指し示すだけではな

抜粋7 (抜粋6の続き)

21 D: ʔāā

enter

((トビウサギが)) 入ってるぞ

(3.0)

22 K: ⁽¹⁰⁾ ee?

INT

エ?

(3.6)

23 D: ɲláu ⁽¹¹⁾ (khóè) ʔò hāā [ɲlūnī-sì
there people be -f:s:N

そこに人々がいるところ、[ノネの木のところ]に((トビウサギが入っている))

24 K:

[ɲlūnī ⁽¹²⁾

DEM (near)

こっち

xa 内ツメ (xとaの音)

25 K: zá: xá ʔàbè hī tsʰáo ʔí zá xá

PP (dir) FOC 3:m:s:N future (today) dig be PP (dir) FOC

((ノネの木の方))に、そいつ((トビウサギ))はいる。そっち((ノネの木))の方を掘れ

26 D: ⁽¹³⁾ ɲlūnī-sì zà ʔama tsʰáo ɲlūnī-sì hī sáa-kù ʔúbī ʔí

-f:s:N PP (dir) 3:m:s:A dig -f:s:N future (today) long take out be

ノネの木の方に、そいつ((トビウサギ))を掘れ。ノネの木((の方))に((トビウサギは))いる。

((ノネの木を))長く掘って抜け

27 K: zà xá ʔàbè cì xāū

PP (dir) FOC 3:m:s:N ASP (hab) curvy

((ノネの木の方))で、それ((トビウサギ用の鉤竿))は曲がっている

xāū is curvyの土

(10) KはDのいる右側に顔を向ける。

(11) DはKの方を見ながら前方に左手を伸ばして指さしを行う(写真8)。

(12) Kは右斜め前でトビウサギの巣穴を掘っているOの方を見ながら、Oの手前にあるノネの木を右手で指さす。

(13) Dは前方に左手を伸ばして指さしを行う。



写真8 DはKの方を見ながら前方に左手を伸ばして指さしを行う

く、一行がカーの岸に達すること、一行がカーの岸を進んだ後に車に着くことを描写的にあらわしている。こうした環境と連結したジェスチャーを会話に用いることで、パフォーマンス的なジェスチャーはそのリアリティを強化・増幅する。

会話における時間的フレームの移行はしばしば空間的フレームの移行(想像上の空間の利用を含む)も伴う。上記の復路の移動ルートについての説明では、写真5、6の環境と連結したジェスチャーが環境全体を身体化し、相互行為の場は景

観の全体と重なっている。また、話し手と受け手の双方が景観を見渡すような視点を確立している。それから話題はキャンプに帰ってからの夕食へと移るが、近接の指示詞と直示的ジェスチャーを組み合わせることで付近を指し示したことが契機となり、再び現在のトビウサギ猟の状況へと移行する。その後、話題は過去のその付近の状況へと移る。しかし、DとKが近接の指示詞と直示的ジェスチャーを組み合わせることでトビウサギの潜んでいるポイントへとその場の人々の視点を誘導したことを契機として話題はまた現在へと戻る。このようにグイ／ガナの会話では、時間的フレームと空間的フレームのいずれの移行でも、近称や遠称の指示詞、直示的・描写的ジェスチャーが効果的に用いられることでオリゴとの関係が密接に保たれていることが多い。これはグイ／ガナに特徴的なリアリティの生成と結びついている。

IV 結論

言語とジェスチャーは、発話者の思考を表現するだけではなく、文化的な意味と存在の世界におけるその位置づけを示す [Merleau-Ponty 1962 : 193]。グイ／ガナの近称・遠称の指示詞および直示的・描写的ジェスチャーは、その都度の社会的状況に応じた環境に連結した発話・ジェスチャーとしてオリゴ、すなわちコミュニケーションが起こっている「今ここ」と周囲の環境との結び目を作る [Ingold 2000 : 358] 働きを担っている。こうした働きこそが指標性の主要な特徴であり、それによってグイ／ガナの近称・遠称の指示詞および直示的・描写的ジェスチャーは、その環境内の様々な記号論的フィールドに分散する記号論的資源を行為連鎖の中で組織化することに大きく貢献している [cf. Goodwin 2000 ; Goodwin and Cekaite 2018]。例えば抜粋4では、直示的ジェスチャーが見るべきポイントや進むべき方向を視覚的に指し示すとともに近称の指示詞がそれらに注意を払うべきタイミングを聴覚的に指示していた。直示的ジェスチャーや近称の指示詞はこのようにオリゴと環境の間に位置づけられ、相互行為の参加者の感覚を方向づける。一方、遠称の指示詞を用いた発話は一般に、受け手に参照物を推測するための背景知識を要求するので、受け手がその文化的実践に習熟していないと社会的状況

に応じた相互理解を達成することは難しい。しかし抜粋4では、遠称の指示詞をより指標性の高い近称の指示詞や直示的ジェスチャーと組み合わせることで、知識の共有度の少ない受け手の知覚や行為がより空間的・時間的に離れたところに誘導されていた。また抜粋5-7でも、遠称の指示詞がオリゴを離れた過去や未来の出来事について述べるために用いられたが、近称の指示詞と直示的ジェスチャーの使用によってそうした出来事は再びオリゴとつながり、話し手と聞き手の視点がスムーズに移行するようにデザインされていた。さらに描写的ジェスチャーは、環境内の事物とジェスチャーの図像的な類似性に基づいて構成されることにより、それ自体がオリゴと環境との結び目となれる。抜粋4では描写的ジェスチャーが、移動に関わる動作や状態を視覚的にあらわすことで話し手と受け手の知識状態のずれを調整していた。また抜粋5-7では、描写的ジェスチャーが指示的なジェスチャーと組み合わせられることで環境全体をコミュニケーション空間と連結していた。

日常的相互行為は、その参加者のハビトゥス [Bourdieu 1977, 1990] を形成するとともに、その主要な場としてのマイクロ・ハビタット [Ochs et al. 2005]⁸⁾ を(再)構成することに寄与する。本稿で見てきたグイ／ガナの道探索実践は、そうしたハビトゥスとマイクロ・ハビタットの相互構成過程を示す好例である。すなわち、グイ／ガナは道探索実践を通じてその特徴的な環境との関わり方を身体化していくとともに、自分たちが住みやすいようにその微視的な環境を作り変えていく。抜粋4で分析した直示的ジェスチャーや近称の指示詞の用法は、ブッシュの中で身体がとるべき姿勢やなすべき振る舞いを直接的に示している。こうした直接的な指標性を表明し続けることでブッシュは、様々な年代の化石が埋まった地層のように、グイ／ガナの活動の痕跡が積み重なり、歴史的・文化的な意味に満たされた場所となっていく。そうした歴史的・文化的な意味は、描写的ジェスチャーやグイ語／ガナ語の多様な語彙によってもあらわされる [Takada 2016b]。さらに近称の指示詞や直示的ジェスチャーを遠称の指示詞や描写的ジェスチャーと組み合わせることで、グイ／ガナは自己を中心において環境全体を身体化し、相互行為の舞台を景観の全体と重ねることさ

えある（抜粋3、5）。グイ／ガナのこうした環境に連結した発話やジェスチャーの使用は、名詞句階層を上げて記号の抽象度や象徴性を高めていくことよりもその指標性、すなわち頻繁にオリゴに立ち返って様々な記号論的フィールドに分散する記号論的資源を身体化し、自らの身体を環境の中に位置づけることに重きがおかれていることを示す。これは複数の分人的な自己〔Strathern 1988, 1990〕（本特集の浅井論文も参照）を入り組んだ形で環境に埋め込むとともに、環境を生き生きとした人格のようにとらえることを可能にする。そうした関係は「身体－精神－環境の感覚的な連関」〔Howes 2005：7〕のグイ／ガナにおける特徴的な実現のされ方を可能にしている。それは、時に想像の世界に遊びながら、身の回りの環境や人々との濃密なやりとりで確固たる足場を求め続ける生活世界である。

謝辞

本稿のもとになった研究は、以下をはじめとする研究プロジェクトによって制度的・財政的な支援を受けることで可能になった。ここに記して深謝したい。稲盛財団研究助成「サヴァンナの視覚文化：サン社会におけるジェスチャー・コミュニケーションに関する人類学的研究（平成24年度、研究代表者：高田明）」、科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）「教育・学習の文化的・生態学的基盤：リズム、模倣、交換の発達に関する人類学的研究（平成24-27年度、課題番号：24242035、研究代表者：高田明）」、科学研究費補助金・基盤研究（A）（海外学術調査）「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける景観形成の自然誌（平成28-令和2年度、課題番号：16H02726、研究代表者：高田明）」。

注

- 1) 相互行為の人類学のパイオニアであるGoffmanは、「ある人がそこに「居合わせている」全ての他者の素の感覚に接することができ、全ての他者もその人に接することができると気づいている環境」のことを「社会的状況」と呼び、社会的状況は人類学や社会学において見過ごされてきたが、真剣な学問的探究の対象になりうると主張した〔Goffman 1964〕。Goffmanはさらに、多様な社会的状況を鮮やかに分析し、日常的相互行為の背後に潜む秩序

を次々と明らかにしていった〔cf. 中河、渡辺（編）2015〕。こうした主張や分析は、上述の諸問題に悩まされていた人類学、とりわけ言語人類学の関心と響き合うものだった。例えばW.H. Goodenoughは「文化の研究にとっての適切な現場は、文化的な構造が状況づけられているローカルな活動である」〔Goodenough 1981：102-103〕と述べた。またMarjorie H. Goodwinは「対面相互行為の分析は言語、社会組織、文化を統合的なパースペクティブから研究する機会を与えてくれる」〔Goodwin 1990：2〕という。これらはさらに、心理学における社会・文化的アプローチ、社会学におけるエスノメソドロジーと会話分析、言語学における社会言語学や語用論などとも呼応し、相互行為の人類学と呼ぶべきアプローチを形成するようになった〔高田2019〕。

- 2) 喜多〔2002〕は、この分類体系を概念的なもののみなしている。したがって、あるジェスチャーが同時に複数のタイプのジェスチャーとして働くことも可能である。こうした見方は、相互行為において具体的なジェスチャーの働きを分析する時に特に重要である。
- 3) 会話例は各行3段からなり、上段は実際に発話された原語、中段はグロス、下段は日本語訳である。上段および下段では、＝はそれで結ばれている発話が途切れなくつながっていること、〔 〕で囲まれた隣接する発話はそれらがオーバーラップしたこと、*で囲まれた部分は発話が弱まっていること、< >で囲まれた部分は前後と比べてゆっくり発話されていること、> <で囲まれた部分は前後と比べて早く発話されていること、－は直前の語や発話が中断されていること、（ ）で区切られた数字（e.g. 0.6）はその秒数の沈黙、（（ ））はその都度必要な注記を示す。記号のさらに包括的な解説については、<http://www.augnishizaka.com/transsym.htm>を参照。
- 4) 略語は以下をあらわす：ADV；副詞、ASP；相（hab-習慣、sta-状態、wit-同伴）、DEM；指示詞、DRV；派生語（adv-副詞的）、FOC；焦点、INT；感嘆詞、INTERR；疑問詞、NEG；否定、PER；完了、人-性-数-接尾辞は略語の組合せで示す（e.g. -f:p:G）、ただしm：f：cは男性：女性：共通、s：d：pは単数：双数：複数、N：A：Gは主格：目的格：所有格、POS；可能、PP；後置詞（dir-方向、plc-場所、pos-所有、toward-目的）、代名詞は略語の組合せで示す（e.g. 1：c：p（in）：N）、ただし1：2：3は一人称：二人称：三人称、m：f：c

は男性：女性：共通、s：d：pは単数：双数：複
数、in：exは包括：除外、N：A：Gは主格：目的
格：所有格、PTC；小辞、時制は単語で示す（e.g.
‘future（today）’-今日未来）。

- 5) 中川 [1997] によれば両言語は系統的・類型論的
に非常に近く、両言語の話者がお互いに自分の言
語でコミュニケーションするというデュアル・リン
ガリズムが確認される。本稿グイ語／ガナ語の音
韻表記はできるだけNakagawa [2014] に従った。
- 6) これはまず、サン人の優れた視覚と方向感覚がゲ
リラ戦に効果的だと考えられたからであった。加
えてこの戦略は、地域社会においてサンが「野生の
魔術的な力をもつ」と信じられてきたことを利用し、
実戦においてSWAPOに脅威を感じさせることもね
らっていた。さらに、こうした政策によって南ア
フリカは、白人の植民地支配に対して立ち上がった
黒人という解放運動が示した図式を、先住民と
それを支援する白人が共産ゲリラと闘っていると
いう図式に置き換えることをねらっていた [Takada
2015]。
- 7) このようにグイ／ガナは、自分たちが用いる道を
ならすためにしばしばキャンプの住人が協力して
そこにある障害物を取り除いたり凹凸を平たくし
たりする。
- 8) マイクロ・ハビタットは、相互行為において参与
者が「住んで」とみなされる微視的な環境を指
し、「身体的ニッチ」（例えば参与者同士の身体的配
置）および「物質的ニッチ」（例えば地表の状態や
樹木の分布）の両者が含まれる [Ochs et al. 2005：
554-555]。

参考文献

Bourdieu, Pierre

1977 *Outline of a Theory of Practice*. Richard Nice
(trans.). Cambridge University Press.

1990 *The Logic of Practice*. Richard Nice (trans.).
Stanford University Press.

Clifford, James

1986 On Ethnographic Allegory. In *Writing Culture:
The Poetics and Politics of Ethnography*. James
Clifford and George E. Marcus (eds.), pp.98-
121. University of California Press.

Clifford, James and George E. Marcus (eds.)

1986 (1996) *Writing Culture: The Poetics and
Politics of Ethnography*. University of California
Press. (『文化を書く』春日直樹、和邇悦子、
足羽與志子、橋本和也、多和田裕司、西川

麦子訳、紀伊國屋書店)

Duranti, Alessandro

1997 *Linguistic Anthropology*. Cambridge University
Press.

福井 勝義

1991 『認識と文化——色と模様の民族誌』東京大
学出版会。

Goffman, Erving

1964 The Neglected Situation. *American Anthropologist*
66 (6) : 133-136.

Goodenough, Ward H.

1981 *Culture, Language and Society*. Benjamin
Cummings.

Goodwin, Charles

2000 Action and Embodiment within Situated
Human Interaction. *Journal of Pragmatics* 32
(10) : 1489-1522.

2007 Environmentally Coupled Gestures. In *Gesture
and the Dynamic Dimension of Language:
Essays in Honor of David McNeill*. Susan D.
Duncan, Justine Cassell and Elena T. Levy
(eds.), pp.195-212. John Benjamins.

1991, 7

Goodwin, Marjorie H.

1990 *He-Said-She-Said: Talk as Social Organization
among Black Children*. Indiana University
Press.

Goodwin, Marjorie H. and Asta Cekaite

2018 *Embodied Family Choreography: Practices
of Control, Care, and Mundane Creativity*.
Routledge.

Gordon, Robert J. and Stuart Sholto Douglas

2000 *The Bushman Myth: The Making of a Namibian
Underclass* (2nd edition.). Westview Press.

Hanks, William F.

1996 *Language and Communicative Practices*.
Westview Press.

Hayashi, Makoto

2013 Turn Allocation and Turn Sharing. In *The
Handbook of Conversation Analysis*. Jack
Sidnell and Tanya Stivers (eds.), pp.167-190.
Wiley-Blackwell.

Howes, David

2005 Introduction: Empire of the Senses. In *Empire
of the Senses: The Sensual Culture Reader*.
David Howes (ed.), pp.1-20. Berg.

Ingold, Tim

2000 *The Perception of the Environment: Essays on*

- Livelihood, Dwelling and Skill*. Routledge.
- Kitzinger, Celia
2013 Repair. In *The Handbook of Conversation Analysis*. Jack Sidnell and Tanya Stivers (eds.), pp.228-256. Wiley-Blackwell.
- 喜多 壮太郎
2002 「人はなぜジェスチャーをするのか」『ジェスチャー・行為・意味』斎藤洋典、喜多壮太郎(編)、pp.2-23、共立出版。
- 小山 亘
2008 『記号の系譜——社会記号論系言語人類学の射程』三元社。
2009 「シルヴァスティンの思想——社会と記号」『記号の思想——現代言語人類学の一軌跡(シルヴァスティン論文集)』マイケル・シルヴァスティン著、小山亘(編)、榎本剛士、古山宣洋、小山亘、永井那和訳、pp.11-233、三元社。
- Liebenberg, Louis
1990 *The Art of Tracking: The Origin of Science*. David Philip.
- Merleau-Ponty, Maurice
1962 *The Phenomenology of Perception*. Colin Smith (trans.). Humanities Press.
- 中河 伸俊、渡辺 克典(編)
2015 『触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学』新曜社。
- 中川 裕
1997 「ゲイ語の2方言とその社会言語学的側面」『アジア・アフリカ文法研究』26: 33-40。
- Nakagawa, Hiroshi
2014 *Glu-Japanese Dictionary*. Unpublished Manuscript.
- 西阪 仰
1997 『相互行為分析という視点——文化と心の社会学的記述』金子書房。
- Ochs, Elinor, Olga Solomon and Laura Sterponi
2005 Limitations and Transformations of Habitus in Child-Directed Communication. *Discourse Studies* 7 (4-5): 547-583.
- Sacks, Harvey
1992 *Lectures on Conversation*, Vol. I. Wiley-Blackwell.
- Schegloff, Emanuel A.
1987 (1998) Between Micro and Macro: Contexts and Other Connections. In *The Micro-Macro Link*. Jeffrey C. Alexander, Bernhard Giesen, Richard Münch and Neil J. Smelser (eds.), pp. 207-234. University of California Press. (「ミクロとマクロの間——コンテクスト概念による接続策とその他の接続策」『ミクロ・マクロ・リンクの社会理論』石井幸夫他訳、pp.139-178、新泉社)
- 2007 *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*, Vol. 1. Cambridge University Press.
- Sidnell, Jack and Nick J. Enfield
2012 Language Diversity and Social Action: A Third Locus of Linguistic Relativity. *Current Anthropology* 53 (3): 302-333.
- Silberbauer, George B.
1965 *Report to the Government of Bechuanaland on the Bushman Survey*. Bechuanaland Government.
- シルヴァスティン、マイケル
2009 「言語指示階層の認知的含意」『記号の思想——現代言語人類学の一軌跡(シルヴァスティン論文集)』マイケル・シルヴァスティン著、小山亘(編)、榎本剛士、古山宣洋、小山亘、永井那和訳、pp. 393-471、三元社。
- Stivers, Tanya
2013 Sequence Organization. In *The Handbook of Conversation Analysis*. Jack Sidnell and Tanya Stivers (eds.), pp.191-209. Wiley-Blackwell.
- Strathern, Marilyn
1988 *The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*. University of California Press.
1990 Negative Strategies in Melanesia. In *Localizing Strategies: Regional Traditions of Ethnographic Writing*. Richard Fardon (ed.), pp.204-216. Scottish Academic Press.
- 菅原 和孝
1998 『会話の人類学——ブッシュマンの生活世界〈2〉』京都大学学術出版会。
- 高田 明
2019 『相互行為の人類学——「心」と「文化」が出会う場所』新曜社。
- Takada, Akira
2005 The Importance of Gesture and Grammar in Displaying Directional Markers: Evidence from the San of the Central Kalahari. In *Construction and Distribution of Body Resources: Correlations between Ecological, Symbolic and Medical Systems*. Kazuyoshi

- Sugawara (ed.), pp.31-55. The Head Office of the Project on “Distribution and Sharing of Resources in Symbolic and Ecological Systems: Integrative Model-Building in Anthropology”.
- 2006 Explaining Pathways in the Central Kalahari. *Senri Ethnological Studies* 70: 101-127.
- 2008 Recapturing Space: Production of Inter-subjectivity among the Central Kalahari San. *Journeys: The International Journal of Travel & Travel Writing* 9 (2) : 114-137.
- 2015 *Narratives on San Ethnicity: The Cultural and Ecological Foundations of Lifeworld among the !Xun of North-Central Namibia*. Kyoto University Press & Trans Pacific Press.
- 2016a Employing Ecological Knowledge during Foraging Activity: Perception of the Landform among the Glui and Gllana. *African Study Monographs, Supplementary Issue* 52: 147-170.
- 2016b Unfolding Cultural Meanings: Wayfinding Practices among the San of the Central Kalahari. In *Marking the Land: Hunter-Gatherer Creation of Meaning in Their Environment*. William A. Lovis and Robert Whallon (eds.), pp.180-200. Routledge.
- 田中 二郎
- 2017 『アフリカ文化探検——半世紀の歴史から未来へ』 京都大学学術出版会。
- Wenger, Etienne
- 1998 *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*. Cambridge University Press.

(2019年11月10日採択決定)

Deep Engagement with the Environment

The Use of Demonstratives and Gestures
in the Wayfinding Practices of the Glui/Gllana

Akira Takada

[linguistic anthropology, interaction analysis, southern Africa, Glui/Gllana, wayfinding practice]

Studies in cognitive anthropology address the difficult problems of how to examine knowledge that is not expressed explicitly, how to identify those to whom folk knowledge is indigenous, and the question of whether we are really able to understand others. The anthropology of interaction approach offers a promising solution to these problems. However, it has not sufficiently examined how gesture and other semiotic resources distributed in the environment are used for organizing wider interactions. This paper examines the wayfinding practices of the Glui/Gllana, two closely-related groups of the San. It is focused on indexicality in the uses of proximal and distal demonstratives, as well as those of deictic and depicting gestures, while the Glui/Gllana move in the bush and hunt in dry valleys. This paper discusses the process by which the Glui/Gllana deepen their engagement with the environment through involving various people in a number of culturally distinctive social situations.